
日本史A

MICKEY

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本史A

【Nコード】

N3046U

【作者名】

MICKKEY

【あらすじ】

高一の学習、日本史Aを小説風にした物です。
テスト勉強にご活用ください。

あくまでテスト対策用ですので、細かい部分は脚色してあります。

第1話「幕末・志士達の時代」(前書き)

高一の学習、日本史Aを小説風にした物です。
テスト勉強にご活用ください。

あくまでテスト対策用ですので、細かい部分は脚色してあります。

第1話「幕末・志士達の時代」

1860年―大老、井伊直弼を襲った「桜田門外の変」。
彼の死をきっかけに、幕府の独裁政治は終わりを告げる。

そして、歴史は大きく夜明けへと動き出す―

安藤信正「もはや、これしか手はありません。」

老中、安藤信正が孝明天皇にそう告げた。

孝明天皇「しかし・・・。」

安藤信正「孝明天皇の妹である和宮様、そして我が江戸幕府14代
將軍徳川家茂様の結婚・・・。朝廷と幕府の結びつきを強め、尊攘
派を抑えるのです。」

孝明天皇「それがお前の言う公武合体・・・か。」

そして、孝明天皇は頷く。

孝明天皇「・・・やむを得ん。」

しかし・・・その2年後だった。

1862年、「坂下門外の変」は起こったのだ。

「安藤覚悟ッ！」

安藤信正「なっ・・・!？」

安藤の背中を太刀が一閃――辺りに飛び散る血飛沫。

彼は公武合体運動の反対派の者に、背中を斬られ負傷した。

それは、武士にとって「失脚」を意味していた。

島津久光「幕府に改革を要求する。」

薩摩藩の島津久光。彼は孝明天皇の許可を得て、はるばる江戸まで来ていた。

彼が要求した「文久の改革」。それを担当したのは主にこの3人であつたと言う。

政治総裁職・松平慶永。

将軍後見職・徳川慶喜。

京都守護職・松平容保。

そしてこの「京都守護職」の元には、かの有名な「新撰組」が在つたのだ。

1863年――

この年、薩摩藩と長州藩が大きく動き出す。

薩摩武士A「グハッッッ！」

吹き飛ぶ薩摩藩士。

薩摩武士B「エゲレスの力は……ここまで……！」

この年の7月に起きた「薩英戦争」。元はと言えば、例の島津久光の行列をイギリス人が横切った事が発端だった。

激怒した薩摩武士はイギリス人を斬り捨てた。だが異国人である彼らは大名行列の仕来たりなど、知る由もなかったのだ。

この「生麦事件」の報復として、薩摩を攻めるイギリス軍。

その圧倒的な技術力の差に、薩摩藩は完敗したのだ。

鹿児島市街を焼き払われて……。

同じく1863年。長州藩は幕府に5月10日に攘夷を決行する事を約束させた。

そしてその当日、長州藩は単独で攘夷を決行したのである。

下関海峡を通る外国船を砲撃した長州藩。

その行動が、後に長州藩の過失となる。

薩摩武士C「行くぞ……会津の武士よ！」

会津武士A「おう！斬り捨て……御免！」

公武合体の立場に立つ薩摩藩は会津藩と手を結び、長州藩や尊攘派を京都から一掃した。

蒸し暑い日だったと言う。この事件はこう呼ばれている。

「八月十八日の政変」と。

- 1864年 -

長州武士A「おのれ薩摩、会津・・・！同志よ！長州の勢力を回復する！時は満ちた！明日、京都へ攻め入る！」

この年の7月、長州藩は巻き返しを図り京都へ攻め入った。しかし・・・。

薩摩武士C「懲りぬな長州め・・・！」

会津武士A「京都へ攻め入るとは・・・！貴様らはもう、朝敵（朝廷の敵）という汚名を背負う覚悟だな。」

桑名武士A「その薄汚い意地ごと、叩き斬ってくれる。」

結果は、長州の惨敗。薩摩・会津・桑名藩に破れ、更には「朝敵」のレッテルまで貼られてしまったのだ。

長州武士A「禁門の変・・・敗北なり・・・！」

そう、この事件が「禁門の変」。この事件が、長州に更なる悲劇を呼ぶ。

- 8月 -

禁門の変から一か月後、「朝敵」である長州藩の征討を命じた幕府。全国を敵に回した長州―「第一次長州征討」。

更に振りかかる戦い。

前年に外国船を砲撃したツケが、このタイミングで回って来た。
「四国連合艦隊下関砲撃」。英・仏・米・蘭の4カ国連合艦隊が下関を占領した。

こうして、長州は幕府に降伏したのである。

だがここ数年の出来事は、歴史の歯車を確実に動かしていた。

薩・長の両藩は欧米諸国との戦いを経験し、攘夷は不可能であることを悟っていた。
ならば選ぶ道は一つ。

「討幕」。

高杉晋作「近代的な軍隊を作る。入隊したい奴は名乗り出る。我が奇兵隊の戦力として、重宝する。」

木戸孝允「軍備の洋式化を図る・・・その近代的な戦力で、幕府を討つ。」

この二人が藩論を討幕へと転じて行っただ。

また、薩摩でも似たような動きが起こっていた。

西郷隆盛「イギリスは強い・・・攘夷は不可能でござす。」

大久保利通「討幕・・・どうやらそれが残された唯一の道らしい。」

長州武士A「ふざけるなっ！誰が薩摩なんかと・・・！」

薩摩武士C「こっちの台詞だ！長州とは組めぬ！」

幕府の無力を知って、薩・長両藩に近付いて来たのはイギリス公使パークスだった。

幕府を援助するフランスよりも優位に立とうとして、薩長に目をつけたのだ。

だが両藩のわだかまりは、簡単には解消されなかった。

だがこのままで良いはずがない。日本が夜明けを迎えるには、薩長の協力が不可欠――

一体どうすれば・・・。

そこに現れたのは、伝説の男「坂本竜馬」だった。

- 1886年 -

坂本竜馬「いつまでいがみあつとる気じゃ。夜明けは始まつとる。」

中岡慎太郎「薩長の力なくして、夜明けは訪れぬ。」

土佐藩出身のこの2人の仲介により、遂に両藩は同盟を締結。それこそが「薩長同盟」、日本を大きく動かした瞬間である。

- 幕府 -

「長州を再び攻めよ・・・！」

「第二次長州征討」が下された。だがもはや、薩摩藩はもろろんのこと、幕府に従う藩など少ない。出兵に消極的な藩が大多数だった。

薩摩武士C「来おった・・・幕府の働きアリ共が・・・。」

長州武士A「夜明けが見えぬ連中め・・・薩長の近代的装備の力、ここに示す！」

幕府は各所で薩長に大敗。更に14代將軍徳川家茂が大坂城で病没。もはや幕府には引き上げることしか出来なかった。

- 1867年 -

亀山社中・海援隊に所属していた竜馬。

彼は船中で、「船中八策」を考案する。

遂には土佐藩を動かし、15代將軍徳川慶喜に大政奉還を実現させた。

この「船中八策」が慶喜に渡るまで、2人の人間を通したと言う。

竜馬から「後藤象二郎」へ、象二郎から「山内豊信」へ。そして豊重から慶喜へ。

10月14日、「討幕の密勅」が薩長へ下った。

そしてその日、大政奉還が行われたのである。大政奉還の目的、それは「討幕の機先を制する」ことにあった。また、政権が天皇に戻ったとしても、徳川家は再び必要とされる。大きな力を持った大名家なのだから。慶喜はそこまで読んでいた。

だがそんな思惑も虚しく、12月9日に「王政復古の大号令」が出されてしまったのだ。

幕府は廃止、そして天皇自らの政治を宣言。更に夜に行われた「小御所会議」で、慶喜は「辞官（内大臣）」・「納地」を迫られる。こうして徳川家は役職も土地も奪われ、失脚した。

そして、坂本竜馬暗殺。近江屋で襲われた彼は、額を一闪され「もう無理じゃ」と言い残し逝ったという。

- 1868～1869年 -

戊辰戦争、開幕。

「鳥羽・伏見の戦い」

旧幕府軍の15000の兵と、新政府軍の4～5000の兵が激突した。

だがその圧倒的な質量差虚しく、新政府軍の近代的な武装によって旧幕府軍は大敗。

「年貢半減」を唱えた相楽総三ら「赤報隊」も処刑された。

- 3月13・14日 -

「江戸城、無血開城」

西郷隆盛と勝海舟の会談により、江戸城は無血開城された。

「会津の戦い」

この戦いでは、悲劇が起きた。白虎隊の悲劇である。
20人自殺、そのうち1人のみ蘇生。

1869年5月、箱館で遂に最終決戦。

「五稜郭の戦い」

土方歳三「む・・・無念ツ・・・！」

元新撰組の土方歳三、敗死。

中心人物である榎本武揚は捕獲されたが、黒田清隆の命乞いで助け、明治新政府でも活躍したと言う。

こうして幕を閉じた戊辰戦争――

その戊辰戦争の中、幕府は明治維新を続けていたのだ。

全国は統一され、新政府が動き出す。

これが、明治時代の幕開け、日本の夜明け――

第2話「明治維新」

開国直後に、全国規模で流行した「コレラ」。
また、それに重なる政治・経済の混乱。

その結果、人々の間に芽生えた「世直し」の意識。

それが、幕府を大きく苦しめることとなる。

- 1866年 -

薩長同盟が結ばれ、この年、神戸・堺・大阪などで起こった激しい「打ちこわし」。更には江戸でも起こり、それは幕府への不信を表していた。

第二次長州征討の最中の出来事である。

- 1867年 -

東海地方から中国・四国地方にかけて都市を中心に起こった「ええじゃないか」。

伊勢神宮の御札が降ったとして、人々は乱舞した。

これは討幕派が、幕府の治安を混乱させるために起こしたものである。

この年は、大政奉還や竜馬の暗殺、王政復古の大号令や小御所会議などが行われた重要な年でもある。

また、この頃、苦しい生活や病氣から民衆を救済する事を目的とし

た宗教が生まれる。

黒住教 ↑ 黒住宗忠

天理教 ↑ 中山みき

金光教 ↑ 川手文治郎

開港場の「居留地」で貿易が行われ、そこには国際色豊かな景観が存在した。

またアメリカ人医師で宣教師でもあるヘボンが、日本最初の和英辞典を完成させ、また英語塾を開いたりローマ字を伝えたりするなど、様々な方面で活動した。

その英語塾は今の明治学院大学となっている。

- 1868年 -

戊辰戦争のさなか、新政府は「五箇条の誓文」を発表し、その翌日には「五榜の掲示」を示した。

「五箇条の誓文」の原案は、由利公正 ↓ 福岡孝弟 ↓ 木戸孝允を経て完成されたと言う。

誓文に出てくる「陋習」とは「攘夷運動」のことであり、「天地ノ公道」とは「国際法」のことである。

これを神々に誓う形で、新政府は発布した。

また、五榜の掲示ではキリスト教や一期の禁止を定めた。「邪宗門」とはキリスト教のことである。

また、政府は「政体書」を公布し、太政官に権力を集中させる政府の組織を示した。
更には江戸を東京都改め、年号を明治とし「一世一元の制」を定める。

「神仏分離令」も出され、政府は「文明開化」を進める一方で、神道を国の宗教とする方針を決め、その結果仏教を排除する「廃仏毀釈」が起こった。

戊辰戦争と同じ頃に「浦上信徒弾圧事件」も起こり、外国から抗議の声が相次いだ。

- 1869年 -

薩長土肥の四藩が「版籍奉還」を実行。諸藩主もこれを見習つ。旧藩主は「知藩事」とされ、そのまま藩政にあたっていた。

- 1870年 -

大教宣布「神道の国教化」宣言↓中止

また「工部省」が新設され、お雇い外国人を招いて欧米の技術を導入した。

- 1871年 -

本格的に動き出す明治政府。薩長土の三藩の兵士を東京へ収集し、「親兵」とし、その武力を背景に「廃藩置県」を行う。

例の知藩事は東京へ移住させられ、地方には政府が任命した「府知事」「県令」が派遣された。

更に太政官を「正院」「左院」「右院」とし、政府の要職は薩長土肥の四藩の出身者で占められた。

早くも表れ始める「藩閥政府」の性格……。不満を持つ者は決してゼロではなかった。

これら幕末から明治初年にかけての変革を「明治維新」と呼ぶ。

四民平等によって、大名や公家は華族、武士は士族、農工商は平民とされた。平民にも名字の使用が許された。

更に1871年、「解放令」によりえた・ひにんも平民とされたが、差別は根強く残っていた。

また、この年、岩倉具視を大使とする「岩倉使節団」が日本を出発する。

この年に定められた「新貨条例」。それは円・銭・厘を単位とする新貨幣を作ると言うものだった。

- 1872年 -

徴兵告諭が出される。

その中には「血税」の文字があり、人々は生き血を取られると恐れた。

したがって、各地で起きた反対一揆を「血税一揆」と呼ぶ。

文部省が設立され、「学制」が定められた。フランスにならったものだと言う。

反対一揆が各地で起こった。

この年、「国立銀行条例」が定められた。当初は4行しか設立されず、「金貨と交換できる貨幣の発行」を義務付けられていた為、それ以上の設立が進まなかった。

この中心となった人物は「渋沢栄一」。これはアメリカの「ナショナル・バンク」の制度を真似たものであったと言う。

またこの年、土地の自由売買が認められ、地価が定められた。

「地券」の発行もこの年である。土地所有者（納税者）に発行された。

富岡製糸場が設立されたのもこの年である。フランス人ブリュナが関係している。

またイギリスの技術を導入し、鉄道も開通した。

- 1873年 -

地租改正条例が施行された。

地価の3%を地租として金銭で納税させるといった物だった。

徴兵令、開始。満20歳以上の男子は兵役につかされると言う、国民皆兵の原則による近代的な軍隊が作られて行った。

この徴兵令は「大村益次郎」が構想し、暗殺された彼に代わりそれを「山県有朋」が受け継ぎ実現された。

更にこの年、政府は欧米諸国からの非難を受け、キリスト教を黙認した。

大久保利通を卿とする「内務省」の設立。この内務省は官営事業の育成に努めた。

中でも群馬県の「富岡製糸場」はフランスの技術を導入して作られた「官営模範工場」であった。

これら殖産興業の推進に伴い、政商が急成長を遂げた。

太陽暦が採用されたのも、この年である。

「学問のすすめ」を著した福沢諭吉、そして中村正直らは明六社を設立し、明六雑誌などを発行して欧米思想の紹介に取り組んだ。

- 1874年 -

戊辰戦争後に「北海道」と改められた蝦夷地には開拓使が設置され、この年には「屯田兵制度」も設けられ開拓が進んだ。

- 1876年 -

士族へ配給されていた家禄が廃止され、代わりに金録公債証書を配布する「秩禄処分」が行われた。

その後、武士たちは慣れない商売で失敗。「士族の商法」と皮肉られたりもした。

死フは救済策（士族授産）として、資金を貸し付け屯田兵として北海道へ送った。

また、この年政府は「国立銀行条例」を改正し、例の義務を免除したので、銀行は153行まで増えた。

- 1877年 -

地租改正一揆により、地租率は3%から2・5%に引き下げられた。

- 1879年 -

「教育令」が出されたが、翌年には改正された。当初はアメリカ式だったと言う。

そしてこの年、地租改正事業はほぼ完了した。

新政府のスローガンは「富国強兵」。その言葉通り、様々な改革が進められた時代だった。

徴兵令で免役されたのは、「長男」「戸主」「養子」「代人料270円納入者」「病弱者」「官立学校生」などであった。

- 1899年 -

北海道旧土人保護法の制定。アイヌを保護しようとしたが、更に破壊してしまった。

- 1873年 -

「明治六年の政変」。

岩倉使節団

留守政府

- | | |
|-----------|------------|
| ・ 右大臣岩倉具視 | ・ 太政大臣三条実美 |
| ・ 大久保利通 | ・ 西郷隆盛 |
| ・ 木戸孝允 | ・ 大隈重信 |
| ・ 伊藤博文 | ・ 板垣退助 |
| | ・ 江藤新平 |

この年の9月に帰国した使節団は、留守政府が決定した「征韓論」を「内治優先」を理由に反対し、征韓派と離別する。

西郷達征韓派は下野し、大久保利通政権が誕生した。

第3話「自由民権運動」

明治六年の政変の後――

1875年、朝鮮の首都漢城（現在のソウル）に近い「江華島」付近で、朝鮮の領海に侵入し測量を行っていた日本の軍艦が砲撃されると言う「江華島事件」が起こった。

だが、これは日本の武器となった。

この事件を理由に、1876年、日本は強硬な態度で「日朝修好条規」を朝鮮に結ばせ、開国させたのだ。

これは、領事裁判権や関税免除の特権を朝鮮に認めさせる不平等条約であった。

この頃、琉球王国は薩摩藩と清国の両方に従属する状況だった。

そんな中、1871年に日本は「日清修好条規」を清と結び、対等な立場に立つ。

同年、琉球島民が台湾で殺害される事件が発生。

翌1872年、日本は清国に責任を追及すると共に、一方的に琉球を「琉球藩」とし、琉球国王の「尚泰」を「琉球藩王」とした。

1874年、日本は例の琉球島民の殺害事件を理由に「台湾出兵」をし、琉球の領有を主張。子の時の指揮をとったのは「西郷従道」。
1879年、「琉球処分」によって琉球藩を「沖縄県」としたが、清国はこれを認めず、日本への帰属が確定したのは日清戦争後だった。

- 国境の確定 -

日本はロシアとの国境を明確にするため、1875年「樺太・千島交換条約」を結び、1876年にはアメリカ・イギリスに小笠原諸島の領有を宣言し、日本領とした。

そうして、日本が近代国家として成長して行く中、時代に取り残された彼らが最後の意地を見せる。

1874年、「江藤新平」らの「佐賀の乱」を始めとし、1876年には「神風連の乱」（熊本県）・「秋月の乱」（福岡県）、また「前原一誠」の「萩の乱」（山口県）が one after another（次々と）起こった。

上の3つの乱が起きた1876年には、地税に不満を持つ農民たちも各地で一揆を起こし、なかでも三重県を中心とした4県にまたがる「地租改正一揆」は激しかった。

「西郷さん……！戦いましょう！見せつけてやりましょうよ！土族の意地を……強さを……志を！」

西郷「おいどんは……ただ平和に暮らしたいでござす。政府を抜け、この故郷、薩摩（鹿児島）に帰って来たのだから……。」

「土族にはもう……俺達にはもう、帰る場所なんてないんですよ。」

「

西郷「最後の意地でござるか・・・。」

1877年、西郷隆盛と鹿児島県士族が立ちあがる。

徴兵制によって組織された政府の軍隊と激闘の末、半年後に敗れた。

西郷敗北により、武力による反政府行動は影を潜め、代わって言論による反政府運動が高まった。

これがかの有名な「西南戦争」である。

明治六年の政変で政府を去った「板垣退助」や「後藤象二郎」らは、1874年に「民撰議院設立建白書」を政府に提出。これをきっかけに「自由民権運動」が始まった。

- 自由民権運動その1・士族民権 -

板垣は故郷の高知で「片岡健吉」と「立志社」を結成。全国にも政治結社が誕生し、1875年には全国組織として「愛国社」（大阪）が結成された。

そんな中、政府は立憲体制に移行して行く方針を示し、立法上の諮問機関として「元老院」、四方の最高機関として「大審院」を設け、「地方官議会」で地方議会である「府県会」の開催についての審議を行っていた。

政府は1875年の「大阪会議」で板垣と「木戸孝允」（台湾出兵に反対し下野）の政界復帰、立憲政体樹立の詔

みことのり

、前述の「元老院」「大審院」、そして「地方官会議」の設置を決めた。

一方で弾圧策として、1875年に「讒謗律」と「新聞紙条例」を出し、取り締まりを強化した。

- 自由民権運動その2・豪農民権 -

1879年、府県会が開かれると、有力農民らは府県会議員として地方政治に参加、一方で自由民権運動を指導した。

1880年には「国会期成同盟」が結成され、全国の政治結社に「私擬憲法」の作成を呼び掛けた。

私擬憲法の例としては「植木枝盛」の「日本国国権案」や「千葉卓三郎」の「五日市憲法」などがある。

これに対し政府は1880年4月に「集会条例」を出し、警察官が集会の解散を命じることができるようにした。

1878年、政府の中心であつた大久保利通が暗殺されると、「伊藤博文」や「大隈重信」が実験を握った。

国会の早期開設を望む大隈は伊藤と対立。そんな中、1881年に「黒田清隆」が、同じ薩摩出身の政商「五代友厚」に官有物をタダ同然で払い下げようとした。

これを「開拓使官有物払下げ事件」と言う。

それを「東京横浜毎日新聞」のみがスクープし、大スクandalになった。

またこの新聞は福沢諭吉関係の新聞であり、大隈と福沢は仲が良かったと言う。

そのことを知った伊藤は大隈を政界から追放（薩長藩閥政府へ）、払下げを中止した。

その後、1881年「国会開設の勅諭」を出し、10年後の189

0年に国会開設を約束した。
これを「明治十四年の政変」と呼ばれる。これ以後、伊藤が政府の実権を握った。

国会開設に備え、1881年には板垣を党首とする「自由党」が成立、更に翌年1882年には大隈を党首とする「立憲改進黨」が結成された。

そんな中、「岸田俊子」ら女性の民権家も生まれた。

自由党 板垣退助

立憲改進黨 大隈重信

立憲帝政党 福地源一郎

- 自由民権運動その3・農民民権 -

西南戦争の費用をまかなう為、政府は紙幣を発行。産業の発達も手伝い、流通する通貨量が膨らみ「インフレーション」になってしまった。

明治十四年の政変後、大蔵卿となった「松方正義」は松方財政というデフレ対策を行った。

1882年、「日本銀行」を設立し、紙幣回収を行ったのだ。

結果、今度は「デフレーション」に陥り、特に「米と生糸」の価格が暴落。

土地を手放す農民が出没する中、土地を小作人に貸し小作料を取る「寄生地主」が現れた。

「いるんだよなあ、こんな景気の時に小作人に取りついてわずかな金を吸い取る、ヒルみたいな人間がよッ！」

そんな中―1882年、県令「三島通庸」の強圧的な県政（会津三方道路建設を命じるなど）に対して起こった「福島事件」。

県議会議長の「河野広中」は対立し、農民も蜂起した。その後、「群馬事件」「加波山事件」も起こった。「加波山事件」の直後、自由党は解散した。

1884年には「秩父事件」が起こり、困窮した農民たちが「困民党」や借金党を組織して蜂起。軍隊により鎮圧された。

この頃、大隈重信の脱党で立憲改進黨は活動停止した。

1886年、旧自由党の「星亨」・「後藤象二郎」は自由民権派の再結集を呼び掛ける「大同団結運動」を開始。

翌年1887年には、「地租軽減」、「言論・集会の自由」、「外交失策の挽回」の要求をかける「三代事件建白運動」を展開した。それに対し政府は「保安条例」を定め。星らの有力自由民権家を東京から追放した（皇居の半径3里には入れない）。

後藤の入閣などで、運動は分裂したかに思えたが、大同団結運動は留まることを知らず、1890年、旧自由党が中心になって「立憲自由党」を結成した。

1891年ごろから、「川上音二郎」の「オツペケペー節」で自由民権思想を広めた。

第4話「立憲政治と条約改正」

1890年の国会開設に向け、政府は憲法制定の準備を進めた。

1882年、「伊藤博文」らは憲法調査のためヨーロッパへ、「ドイツ」や「オーストリア」などを訪れ、君主権の強い「ドイツ憲法」を学んだ。

ベルリン大学では「グナイスト」、ウィーン大学では「シュタイン」に。

その後、帰国した伊藤は1884年、「制度取調局」を設けて、立憲政治の実現に向けて邁進した。

まず「華族令」を出し、明治維新に関わった者や、政府の人間が華族になれるようにした。

これは「貴族院」開設の準備であり、やがて開設される議会で、「衆議院」を牽制し、藩閥政府を擁護させる為の策であった。

1885年には太政官制を廃止して「内閣制度」を作り上げた。初代内閣総理大臣には伊藤が任命され、第1次伊藤博文内閣が誕生した。

初代内閣は

大蔵卿 「松方正義」

文部卿 「森有礼」

内務卿 「山県有朋」

外務卿 「井上馨」

で構成された。

憲法草案作成は伊藤の元、「井上毅」、「伊東巳代治」、「金子堅太郎」が中心となり、ドイツ人の法律顧問「ロエスレル」の助言を入れながら進められた。

1888年に設けられた天皇の最高諮問機関「枢密院」で憲法は天皇臨席のもと審議され、1889年2月11日に「欽定憲法」（天皇の定める憲法）として「大日本帝国憲法」が発表された。

ドイツ人医師「ベルツ」は内容も分らず憲法発表を祝う日本人を自らの日記で皮肉っている。

c f . ドイツ人ベルツの日記

憲法では帝国議会が関与できない数々の権限「天皇大権」を求めている。

国民は天皇に従う「臣民」とされ、法律の範囲内で言論・著作・集会・結社の自由が認められた。

また憲法と合わせて「皇室典範」も制定された。この時の首相は「黒田清隆」であった。

地方制度の整備は、「山県有朋」とドイツ人「モッセ」を中心に進められた。

また民法はフランス人「ボアソナード」が起草し、1890年に公布（梅謙次郎など賛成）されたが、「穂積八束」の「民法出でて忠孝亡ぶ」などの反対を受け、「民法典論争」にまで発展。

その為大幅に改められ、8年後の1898年までに新しい「民法」、「明治民法」が施行された（ドイツ流）。

しかし、この時の民法ではまだ男尊女卑が認められていた。

更に1889年、「衆議院議員選挙法」が公布され、翌年1890年に初の総選挙が実施された。

しかし、選挙権があったのは「直接国税15円以上を納める、満25歳以上の男性」のみだったので、有権者は全人口の「1・1%」にあたる45万人しかいなかった。

同年（1890年）、第1回帝国議会が開かれ、「立憲自由党」が130議席、「立憲改進黨」が41議席を占め、民党は300議席中171議席を占めた。

政府側の「吏党」は大成会（79議席）・その他など劣勢だった。

第1議会の首相は「山県有朋」で、「政費節減・民力休養」という民党側の主張に対し、政党を無視する「超然主義」（黒田清隆の言葉）の態度で対応した。

政府と議会の対立は1894年に日清戦争が起こるまで続いた。第1議会から第6議会までを「初期議会」と呼ぶ。

初代衆議院議員達――

「憲政の神様」と言われた「尾崎行雄」、後に首相となる「犬養毅」、足尾銅山鉅毒事件で有名な「田中正造」、私擬憲法を作っていた「植木枝盛」など。

立候補条件は「満30歳以上の男子」「直接国税15円以上納税者」だった。

欧米諸国と肩を並べる強国をつくることを国家の目標とする日本にとって、関税自主権の確立と領事裁判権の撤廃は最も重要な課題で

あつた。

- 条約改正までの流れ -

岩倉具視 1871年に日本出発 73年に帰国 欧米の文物・制度の視察

寺島宗則 1878年に条約改正にアメリカを同意させる

← イギリス・ドイツの反対で白紙に

また1877年には「アヘン密輸事件」が起こる

← 犯人のイギリス人「ハートレー」は無罪

井上馨 1882年から交渉開始

外国人に「内地雑居」を認めることや

裁判所に外国人判事を採用、などを条件に

条約改正を迫ったが「ボアソナード」らが反対

イギリス人「コンドル」設計の「鹿鳴館」を作るなど

極端な「欧化政策」をとる

1886年の「ノルマントン号事件」により

領事裁判権の撤廃を求める声が大きくなる

>この時<「三大事件建白運動」 1877年に辞任

大隈重信 「大審院」に限り外国人判事を採用することを条件と交渉した

結果、1889年に玄洋社員に襲われ右脚を失う

青木周蔵 イギリスの同意を得るも、

1891年、ロシア皇太子を「津田三蔵」が襲う
「大津事件」が発生 責任を取り辞任した
またこの時、大審院長「児島惟謙」は
政府の圧力に負けず津田を無期懲役に処した
これは司法権の独立を物語っている

陸奥宗光 1892年第2次伊藤博文内閣

ロシアに警戒したイギリスは1894年「日英通商
航海条約」を締結

領事裁判権の撤廃に成功

その後、「蹇々録」（蹇蹇録）を出す

小村寿太郎 1911年「日米通商航海条約」を締結 関税自主権
を回復

40年以上の時を経て、日本は遂に不平等条約改正に成功したのだ
った。

第5話「日清戦争」

1882年、朝鮮では権力争いが起こっていた。

国王の父の勢力「大院君」一派が、国王の後の勢力「閔氏」の政府に対しクーデターを起こす。

漢城で蜂起した兵士たちは、清国の軍隊に鎮圧された。
これを「壬午軍乱」という。

大院君は攘夷、閔氏は日本に習って近代化という姿勢だった為、日本公使館などが襲撃された。

この壬午軍乱で、清国は朝鮮での支配を強め、日本の影響力は弱まっていた。

日本と協力し、朝鮮の近代化を目指す「独立党」は1884年に日本の支援を受け、漢城で閔氏の「事大党」にクーデターを起こす。

事大党は清を頼り、「金玉均」を中心に起こったこの「甲申事変」を平定した。

日本は清国との衝突を避け、1885年に「天津条約」を締結。
一方、日本国内では「福沢諭吉」が「脱亜論」を発表した。

1894年、「甲午農民戦争」が引き金となり、反乱鎮圧後の主導権をめぐり日本と清は武力衝突する。

「豊島沖海戦」により「日清戦争」が開幕した。

日本「ブ、ブロックだ！ブロックを発動しろ！潰すんだ、清を！」
ブロックは関係ありません

清「日本に・・・日本に食われる・・・！」

戦いは日本軍優勢で終結。1895年には

日本全権：伊藤博文・陸奥宗光

清国全権：李鴻章

で「下関条約」が結ばれ、

？朝鮮の独立の承認

？遼東半島・台湾・澎湖半島の日本への譲渡

？賠償金2億^{テール}両の支払い

？沙市、重慶、蘇州、杭州の4都市を開港

を日本は清に認めさせた。

しかし、満州進出を狙う「ロシア」は「フランス」「ドイツ」と共に遼東半島の返還を日本に命じた。これを「三国干渉」という。日本はこれを拒む力がなく、やむなく勧告に応じた。

国内では「臥薪嘗胆」を合言葉に、ロシアに対する反感が高まり、軍備の拡張が進められた。

同年（1895年）に起きた閔妃虐殺事件以後、朝鮮に対するロシアの影響力が増大した。

また台湾を植民地とした日本は「台湾総督府」を設け、統治の仕組みを整えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3046u/>

日本史A

2011年10月10日12時06分発行